

JASE

現代性教育 研究ジャーナル

2016年
No. 59
2016年2月15日(毎月15日)発行

日本性教育協会
THE JAPANESE
ASSOCIATION
FOR SEX EDUCATION

〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル Tel.03-6801-9307 Mail info_jase@faje.or.jp URL http://www.jase.faje.or.jp 発行人 鈴木 勲 編集人 本橋道昭
© JASE. 2016 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents

国際ナショナル・ビジター・	もっと知りたい女子の性 ¹²	10
リーダーシップ・プログラムLGBT研修参加報告.....	今月のブックガイド.....	12
第2回北東北性教育研修セミナー報告.....	JASEインフォメーション.....	13
性教育の歴史を尋ねる ³⁵		9

◆国際ナショナル・ビジター・リーダーシップ・プログラム LGBT 研修参加報告

同性婚合法化から新たな課題へ

差別・偏見との闘いが続くアメリカで学んだこと

特定非営利活動法人 Rainbow Soup 代表 こいわ 小岳ローマ

はじめに

2015年7月中旬から3週間、アメリカ国務省主催の国際人材交流プログラム「国際ナショナル・ビジター・リーダーシップ・プログラム」(IVLP)に参加した。IVLPとは、国務省が過去70年以上にわたって実施している交流プログラムで、政治、メディア、教育、経済、環境、労働、科学などの分野から参加者の専門性に合わせて、アメリカの関連団体や活動家、議員などと直接意見交換する機会が与えられる。各国のアメリカ大使館・領事館が参加者を推薦するという仕組みで、毎年、世界中から約4000名、日本からは年間40～50名程度が参加している。

今回、「LGBT権利のための草の根擁護活動」という日本人向けのプログラム実施が決定し、以下の5名が研修生に選ばれた(敬称略)。

- 南和行(弁護士・大阪弁護士会所属 なんもり法律事務所)

弁護士の同性パートナーと法律事務所を開設。2015年7月『同性婚 — 私たち弁護士夫婦(ふうふ)です』(祥伝社新書)を出版。

- 村木真紀(特定非営利活動法人虹色ダイバーシティ代表)

LGBTと職場に関する調査、講演活動を行っている。日経WOMAN「ウーマン・オブ・ザ・イヤー2016チェンジメーカー賞」受賞。

- 石崎杏理(FRENS)

セクシュアルマイノリティの子ども若者のサポートを目的に活動するFRENS(Fukuoka Rainbow Educational NetworkS)メンバー。

- 牧園祐也(Love Act Fukuoka代表)

福岡で主にゲイ・バイセクシュアル男性に対するHIV/エイズや性感染症の予防啓発活動を行っているNGO「Love Act Fukuoka(LAF)」代表。

- 小岳ローマ(特定非営利活動法人 Rainbow Soup代表)

LGBT等セクシュアルマイノリティ関連の情報発

信・啓発活動に特化した福岡初の特定非営利活動法人 Rainbow Soup 代表。

※なお、2013 年にも LGBT をテーマにした日本人向けプログラムが実施されている。

寛容と拒否、地域差に驚き

事前に研修で訪れたい都市、学びたいポイントなどのアンケートが行われ、そのうえで最終的に決定した訪問地は、首都ワシントン DC をはじめ、マイアミ（フロリダ州）、バーミングハム、モントゴメリー（アラバマ州）、フェニックス（アリゾナ州）、ロサンゼルス（カリフォルニア州）の合計 5 州 6 都市となった。LGBT に寛容でリベラルな都会と、保守的な南部地域という対照的なエリアを巡る大陸横断ルートである。各地の LGBT 権利活動に関連する団体・組織、議員、研究者、弁護士など、さまざまな人々とのミーティングがセッティングされた。

個人的にはニューヨークやサンフランシスコへの訪問を希望していたが、よく考えれば自力でも行ける都市であり、「LGBT 権利のための草の根擁護活動」というテーマに照らせば、単独ではとても行けそうにない都市をあえて訪れることの方が学びは多いのではと期待がふくらんだ。

(日程)

7 月 11～17 日：ワシントン DC

7 月 17～22 日：フロリダ州マイアミ

7 月 22～25 日：アラバマ州バーミングハム、モントゴメリー

7 月 25～29 日：アリゾナ州フェニックス

7 月 29～30 日：カリフォルニア州ロサンゼルス

研修生の負担は、日本からアメリカまでの往復旅費のみ。滞在中の移動費、宿泊費、食費、雑費から、ちょっとしたおこずかいまでアメリカ国務省が負担し、全日程に同時通訳者 2 名が同行するという、大変な VIP 待遇である。またアメリカの文化や自然、多様性もしっかり楽しんでもらいたいという狙いで休日のアクティビティが推奨されており、プログラムのない週末は観光ツアーや演劇鑑賞などの機会や情報が与えられた。「学ぶ」だけでなく「Have Fun」も重視されているプログラムなのだ。

研修がスタートしたのは 7 月中旬。折しもアメリカ



研修プログラムを支えてくれた現地スタッフ、通訳の皆さんと

では 6 月末に、連邦最高裁の判決により全米で同性婚が合法化されたばかり。訪問先もおそらくその話題でわいているのだろうと想像しながら、首都ワシントン DC に降り立った。

寛容な地域は街のあちこちで、LGBT の権利運動を象徴するレインボーカラーを目にした。店頭には旗が飾られ、横断歩道は虹色に染められていた。手をつないで歩く同性カップルや、同性カップルが登場する広告もよく見かけた。ロサンゼルスのウエストハリウッドという有名なゲイタウンには、昼間から観光バスが乗り付けたり、夜になれば通りに並ぶゲイバーやショップは大変な賑わいを見せていた。



ロサンゼルス、ウエストハリウッドの横断歩道

そうした光景は、南部地域に行くとき一気に影を潜めた。LGBT 支援に関わる団体のメンバーからは、地域の厳しい状況を聞いた。保守的な価値観を重んじる団体が学校の教育委員会に参加し、同性愛者になることがどんなに危険か脅して教育方針に影響を与えようとしていたり、「同性愛者を異性愛者に変える」と触れこんだセラピーを、保守派の団体が無理に受けさせ、訴訟などが起きて大きな問題になっていることなどを聞いた。地域によってこんなにも温度差があるのかと驚いた。

東京都渋谷区が同性カップルを夫婦と同等の関係と認める条例を制定したニュースはアメリカにも届いており、行く先々で「日本の状況はどうなっているのか」という質問を受けた。学校や職場でいじめや差別が数多く存在すること、当事者は自殺のハイリスク層であること、差別禁止法ではなく人権的に不平等な状態であることなどを伝えると、「アメリカでもまったく同じです」と回答されたのは意外であった。

同性婚合法化以降、アメリカのLGBT 権利擁護活動は新たな課題にフォーカスが当たっており、特に活発な議論が行われているのがLGBT を差別から守る法案である。学校や職場はもちろん、住宅、養子、クレジットカードなど生活のさまざまな場面で、性的指向・性自認を理由に当事者たちが差別を受けているという。

昨年、オバマ大統領は連邦政府と取引のある企業に対し、LGBT への差別を禁止する大統領令にサインをしたが、職場での差別を禁止する雇用差別禁止法案(ENDA)は上院を通過したものの、下院は共和党の反対により通過する見込みは立っていない。

しかし共和党内部のLGBT 支援団体や、150万人の会員を擁するアメリカ最大のLGBT 人権活動団体、家族や友人の会などによるきめ細かなロビー活動が盛んに行われている。さらにLGBT 差別を告訴する裁判件数は増えており、弁護士や裁判官の意識も高まっているようだ。

トランスジェンダー権利擁護の高まり

もう一点、特筆したいのがトランスジェンダーに関する取り組みだ。陸上10種競技で元オリンピック金メダリストのブルース・ジェンナー氏がトランスジェ



マイアミビーチ警察署では、オープンリーゲイの当事者が署内のLGBT 施策を指揮している

ンダーであることをカミングアウトし、女性名に改名した。国民的なヒーローが、「長いこと辛い思いをしてきたが、本当に自分になれてとても幸せ」というメッセージを発し、多くの人々が「勇気ある行動」と歓迎した。

この件は各訪問先で必ずと言っていいほど話題のほり、ニュースを機にトランスジェンダー権利擁護活動を応援する寄付金は大幅に増加しているという。トランスジェンダーを受け入れないとしてきた国防総省の規定緩和に向けた作業部会発足、マイアミビーチ警察署のトランスジェンダーに対するガイドライン策定など、さまざまなレベルの動きも広がっている。

日本より大きく先を行っているように見えるアメリカ。同性婚合法化は、アメリカのLGBT 権利擁護活動における一つの通過点に過ぎないのだと痛感した。

LGBT 人権擁護活動の日米比較

現地の視察や支援団体、議員などとの交流から、LGBT 権利運動における日米の違いが見えてきた。

大きく異なる点として、①国レベルの機関でLGBT 対策が展開されていること、②関連組織・団体の多くが行政予算や企業・個人の寄付によって支えられていること、③保守的な宗教観、宗教上の自由権がLGBT 権利運動の妨げになっている、などが挙げられよう。

国務省や国防総省にはLGBT 当事者を支援する団体やグループがあり、省内で働く当事者の職員や家族を支えている。かつて同性愛者と呼ばれば解雇された時代もあったが、長年にわたって水面下で活動してき

た当事者が、「20年以上カミングアウトできなかったが、アメリカ社会の大きな変化を見守ることができて、本当に嬉しい」と語った姿は深く印象に残っている。また司法省にはLGBTワーキンググループが設置されており、当事者に対する差別案件に取り組んでいるという。日本でも国レベルの機関で同様の支援や取り組みをぜひ展開してほしいものだ。

研修参加者が「うらやましい」と何度もため息をついていたのが、団体の豊富な資金力である。組織・地域によって差はあるものの、連邦政府の予算を受けていたり、イベント資金の一部を自治体が負担していたり、企業と個人の寄付を元手に、150人以上の職員を雇い、立派な自社ビルをワシントンDCに構える団体もあった。

潤沢な資金のおかげで、支援プログラム運営・実施、ユースの自立サポート、デザイン性の高い啓発グッズが作られ、マーケティングやPR手法の研究が行われるなど、社会へアウトリーチする活動が活発だ。LGBTを対象にした医療設備やシェルターの運営、若者の自立サポートなど、当事者向けにも多様な支援が展開されている。

地道な活動の積み重ね

幅広い支援活動の一方で、同性婚合法化をきっかけにさまざまなバックラッシュ（揺り戻し）も起こっていた。保守派の団体が「Pray Away the Gay（祈りによってゲイをなくそう）」と呼びかけたり、当事者と接すると「伝染する」というデマを流して恐怖を煽るケースがあるという。

そうしたバックラッシュへの対策、そしてLGBTへの理解を広げるカギとして、地域を問わず多くの組織・団体が指摘していたのが、当事者の個人的なストーリーのシェアである。一人ひとりがどのような人生を歩み、今何に困っているのか。顔が見える個人の繋がり、具体的な当事者の存在は、「人権を守ろう」「平等を達成しよう」という抽象的なメッセージよりも効果的だという。特に、保守的な宗教観によって今なおLGBTへの強い偏見が残る地域で活動する当事者や支援者は、各家や保守系の議員を訪ねて対話を重ね、共通の価値観を見いだすための地道な努力を重ねている。

保守的とされる共和党員でも、LGBT当事者の家



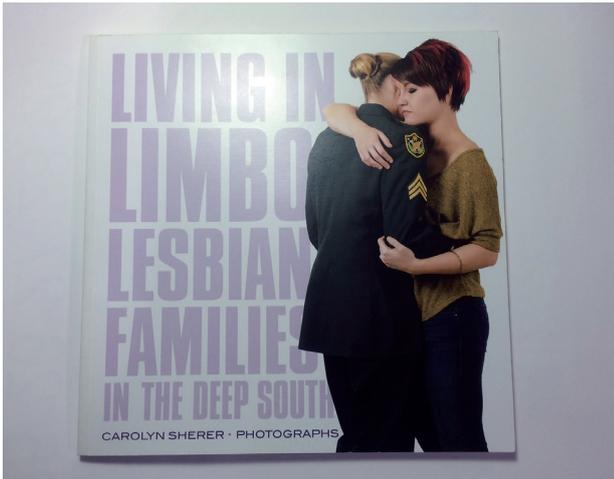
クリニックやユース支援施設、カウンセリングルームを備えたロサンゼルス市のLGBTセンター。当事者以外にも開かれており、年間利用者は4万人を超える

族や支援者からそれぞれのストーリーを聞いたことをきっかけに、考え方を変えて支援側に立ち、地元住民の理解を広げながらその後も多くの議員が再選を果たしているという。

公民権運動発祥の地、アラバマ州にて

公民権運動が広がったきっかけとして知られる、バス・ボイコット事件が起きたアラバマ州。最大都市のバーミングハムに、公民権運動をはじめ、人権、寛容、多様性に関連するさまざまな展示企画を行う文化施設、公民権協会がある。子どもからお年寄りまで世界中から毎年150万人もの人々が見学に訪れるほどで、「人権が学べる街」のランドマークとしても親しまれている。この施設で2012年、レズビアンカップルやレズビアンファミリーをモデルにした写真展「LIVING IN LIMBO」が開催された。同施設がLGBT問題を取り上げた初の展示会であり、モデルはいずれも地元に住む当事者たちである。LGBTに対する住宅や雇用での差別が今もなお根強い保守的な地域のため、人々がどう反応するか心配されたが、否定的な声はあまりなく、逆に支援のメールや電話が100件以上寄せられ、開会式には人波ができるほどの市民が集まったという。地元で支援活動に取り組む当事者の一人は、「会場に入った瞬間、感動で涙が出た」と振り返っている。

展示会の担当者は「私たちの使命は、情報と教育を提供し、すべての人を尊重すること。私たちにとって



レズビアンをテーマにした写真集「LIVING IN LIMBO」。顔を公表することができない多くの当事者は後ろ姿で

も勉強になるし、なるべく多くの人を紹介したいと考えています」と語っていた。保守的な地域でも、当事者の可視化が進めば、重要な人権問題の一つという認識が広がるかもしれないという希望を感じた。

「Have Fun」って大切！

「学ぶ」だけではなく「楽しむ」ことも重視されている IVLP。特にプログラムのない週末は時間が許す限り街を散策し、食事を楽しみ、時にはゲイバーへ出かけるなど、休日を満喫した。マイアミでは広大な湿地帯と川を擁する世界遺産・エバークレーズ国立公園を訪れて、ボートツアーやワニの抱っこ体験をし、アメリカの大自然を体感。砂漠が広がるフェニックスではモンテズマ城国定公園に行き、12世紀初頭に築かれた断崖住居を見学した。

3週間のプログラムを通して30以上の団体・組織を訪問したが、どの都市でも人々は笑顔で歓迎してくれた。ミーティングで出会った当事者の方が、「パートナーと友人を紹介するよ」とレストランで会食をセッティングしてくれたり、観光スポットを車で案内してくれた他、ホームパーティを企画してくれた団体もあり、あたたかいもてなしに感激の連続であった。アメリカ大使館、在福岡アメリカ領事館、現地プログラム運営をサポートした関係者をはじめ、3週間つきっきりで同時通訳とアテンド役を担ってくれたマット・コルピッツさんとカメラア・ニエさんのおかげで、大変充実した研修となった。改めて感謝したい。

紙面の都合上、今回の研修内容すべてを報告する



フェニックス（アリゾナ州）郊外のモンテズマ城国定公園にて



LGBTのオリンピック「World Out Games」(2017年マイアミ・ビーチにて開催) 関係者の皆さんによるホームパーティ

ことはできないが、制度の拡充と当事者の可視化は、人々の意識を変える重要なポイントであることを改めて感じた。

カミングアウトする当事者が少しずつ増えている日本でも、それぞれのストーリーを分かち合い、身近な問題と感じる人を一人でも増やすことが大切だろう。SNSや動画サイトの活用、地元の議員や自治体への積極的なアプローチも有効な方法だ。東京都渋谷区や世田谷区だけでなく、各地の自治体がLGBT対策に動き出していることはとても心強い。超党派の議員連盟や民主党、自民党、公明党内にもプロジェクトチームが立ち上がり、国会でもいよいよ本格的な議論が始まる機運が高まっている。

一様ではないアメリカの現状。しかし粘り強く活動する人々の表情は力強く、自らの仕事に誇りを抱いていた。社会の関心が高まっている。日本でも、もっと何かできるはず。そんな勇気と希望をもらえた研修であった。

◎第2回 北東北性教育研修セミナー報告◎

トランスジェンダーを取り巻く社会病理

地域社会の実践者たち

2015年11月28日（土）午後1時30分より青森県教育委員会、青森市教育委員会の後援を受け、青森市文化交流施設ねぶたの家「ワラッセ」において第2回北東北性教育研修セミナー2015が開催された。当日は県内外から53名の方が参加された。

北東北性教育研修セミナー実行委員会共同代表 宇佐美翔子

はじめに

セミナーに関する基礎的な説明を実行委員会共同代表の岡田実穂が行った。現在、国の通知や公式文書などでは性的マイノリティ、性的少数者という言葉で記載されているが、LGBTという言葉が浸透して、テレビや新聞・雑誌などで広く使われるようになり、一般化してきていることなどを解説した。

今回のセミナーのテーマは、トランスジェンダーだが、性同一性障害という言葉は聞いたことがあっても「トランスジェンダー」は知らないという人は多く、解説の中でも「性同一性障害」という診断名について、また診断の有無に関わらず性別に違和を感じ、身体の性別とは異なる性別で生きたい人、生きているトランスジェンダーについて話をした。

また、青森では多くの相談支援機関等のスタッフが性別違和のある人すべてを「性同一性障害」と呼ぶことがあること。更には「性同一の人」という呼び方が浸透しつつあり、本人が公表していないのに性同一性障害と周囲が名付けるべきではないことなど、言葉の使い方についても解説した。

今回のセミナーを開催するきっかけとなった文部科学省からの通知「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」の内容を確認し、この通知から実質的な生徒児童への対応にたどり着く



ために必要な考え方とは何か、お二人の講師の話からヒントを得てそれぞれの現場に帰っていただきたいと述べ、また、「この街にもいる」ということを実感していただく機会にと、北東北性教育研修セミナー実行委員会で制作した青森の当事者によるメッセージ動画の上映もさせていただいた。

地域で安心して生活するために

「性と人権ネットワーク ESTO」代表の真木柗鷹さんは、1998年10月から秋田県を拠点としてトランスジェンダーとその家族、友人、理解者のために様々な情報発信と交流会などのサポートをしている。

真木さんは、埼玉医科大学で初めて性別適合手術を実施した翌年1999年に活動を開始、交流会の開催、相談対応、行政への働きかけなどの活動を行ってきて

いる。

とくに交流の場をつくることに力を入れてきたが、当初、秋田県内での「移動が大変で行けない」との声に、では地元でやろうと提案すると「地元では人に知られてしまうから」と言われ、なかなか交流が広がらなかったという。活動をするなかで、就労先の社長から「メディアが来るようなことがあればクビ」と言われたこともあったという。



地方と言っても抱えている問題は単一ではなく、地域での人間関係、家族、学校、職場、経済状況など、さまざまな事情や背景を持ち、身体違和の強弱、診断の有無、ホルモン治療の効果や副作用、職場でのカミングアウト、性別の取扱いなど、求めているものも多様である。そうした環境にいる人たちのために、公文書からの性別欄の削除に関する活動も実施してきた。また、日常生活の中で、トランスジェンダー当事者を取り巻く不便と、それに対する働きかけもしてこられた。

教育分野でも文部科学省の通知について、地域の教職員組合の会議や北海道のブロック会議、東北のブロック会議などでも話され、特に自傷行為、大量服薬、治療費用を苦し絶望して亡くなった人もいるということから、自殺予防対策についても話してこられたという。震災を機に被災者支援も必要となり、PTSDを発症したり、自責の念で自殺念慮が強くなり支えが必要な人も出てきたという。

今年（2015年）、友人を亡くされている。性腺摘出によりホルモンバランスが悪くなったことをきっかけとして鬱病を発症し、仕事にも行けなくなっていたという。まだ知られてはいないだけで、性腺摘出後の体調管理が難しいのではないかと感じており、トランスジェンダーの健康にとって性腺摘出が本当によいのか、という思いも強くなっているという。現在の日本の法律では性腺摘出とは記述されてはいないが、生殖不能でなければ性別変更ができず、そのためには性腺を摘出する必要がある。海外では手術の有無に関係なく生活実績により性別が変更できる国も複数ある。トランスジェンダーの健康という視点から、日本の性別変更

要件の改善が必要である。

また、マイナンバー制度が始まることで、性別が隠せなくなる。マイナンバー提出を回避するためにすでに退職したトランスジェンダーもいるという。

1998年から一貫した思いとして「住んでいる地域で安心して暮らせるようにならないものか？」と考え、環境づくりを続けてきたと真木さんはいう。「秋田だけでは大変ですが、隣県に複数の団体がありますので、今日、参加して下さっている皆さんにもご協力いただいて、安全な環境づくりを目指して活動を続けたい」と講座を締めくくられた。

「自分らしく生きる」ために

続いて、トランスジェンダー生徒交流会の世話人であり、教職員ネットワーク代表で、京都の公立高校教員の土肥いつきさんにお話をいただいた。ご自身が性別をトランスする前後の写真を映し出し、それぞれの時代の状況を社会状況と共にお話しいただいた。また様々な人権課題について取り組んで来られた中で体感してこられたことについても話をいただいた。

部落問題や在日問題など、人権問題に取り組む中で、いつきさん自身にはずっと、誰にも言えないことがあったという。それは、スカート履きたい時代があり、有名な体操選手に憧れていて、女性の体になりたいと思っていたということ。いつきさんは、「子どもたちにとっての世界は今も昔も変わらず、親、兄弟、友だち、先生、近所の人くらいで、この人たちに言えないということは、世界の誰にも言えないことと同じ」だと話す。

「隠さなくてはいけない」と思い、心の中の箱に自分の本当の気持ちを入れて、蓋をしていた。そうして生きているある日、同僚からゲイだとカミングアウトを受けた。それをきっかけに同性愛についての勉強をし本を読んでいる中で、在日の子や部落の子が感じていた冷たい風を同性愛者の子たちも感じているのだろうかと考えもした。そして、本の中に「トランスジェンダー」という言葉を見つけた。そこには、生まれた時と反対の性別で生きる人たちだと書いてあり「これは自分のことだ」と思ったという。

トランスジェンダーとして生きると決意してからの行動の変化を写真で説明いただくことで、徐々に、しかし自覚的に自分らしさを手に入れていく様子を会場



の参加者が、真剣に、時に笑顔で見ていたのが印象的だった。性の有り様をわかりやすい図式で説明、セクシュアル・マイノリティの割合を100人の村に例えることで、漠然と「いるらしい」と思っていたものが、リアリ

ティが増したという参加者もいた。現実的なデータを聞くことや読み解き方を知ることで見えなかったものが見えてくる。青森の数字が出てこないのは、青森に病院がなく、他県の病院で診断を受ければ、その県の患者としてカウントされるということ。いないのではなくカウントされないだけで、いることを忘れてはならないと、青森の現状の見えづらさの理由も解説された。

トランスジェンダー生徒交流会では、京都だけでは人数が集まらず、近畿一円から集まってくるという。少数であることはそれだけ悩みが深く、制服、トイレ、更衣室、名簿、班組、整列順、健康診断、体育の授業、修学旅行など、トランスジェンダーの子どもたちは様々な悩みを抱えている。生徒たちにとっては日常生活の至るところに壁があり、その悩みを聞きたいと思ったのが交流会を始めたきっかけだったという。

2003年頃からはいつきさんのもとにトランスの生徒たちからメール相談が寄せられるようになっていた。教育現場でも、2006年、兵庫県の教育委員会が当時小学2年生の男の子を自分の希望の性別での通学すること許可するという出来事があった。それをきっかけに教育委員会も動き出して、2010年に埼玉県教育委

員会で同様のケースがあり、文部科学省が第一弾の通知を出した。そして2014年、全国の小中高に向けて実態調査をし、今回の通知が出た。文部科学省が先立って出したのではなく、現場で踏ん張っている子どもたちがいてこそできたものだった。

いつきさんは、「子どもたちに配慮を、というのが、実際は規則があるから配慮が必要なのだ。学校の規則の壁に子どもたちはぶつかり、特別扱いせざるおえなくなってもいる。制服は性別の印、それを身にまとうことによって人間関係が分断される。学校という場所でなされる性別の刷り込みによって子どもたちはジェンダーの葛藤を起こしている。トランスジェンダーの問題は、身体を変えたい人だから医療の問題、あるいは精神疾患だとか医療的サポートを受ける人だと考えがちだが、そうではなく社会側の課題、社会の問題は社会的に解決する必要がある。解決に向けたひとつの答えがトランス生徒交流会なのだと思う」という。

よく「ロールモデルがない」というが、交流会にはある。トランス女性の大学生、社会人、戸籍変更してないけど希望の性別で生活している人もいる。小学生もいる。保護者もくる。教員もくる。臨床心理士もくる。自分たちにこんなに多くの大人が関心を持っていると子どもたち自身も感じることは社会への信頼になっているともいう。

トランスジェンダーとして生きて、トランスジェンダーと共に生きている中で、いつきさんは「ありのままの私とは、自分の行き先ではなく、自分の生きて来た軌跡の中にあるもの」と講演を締めくくった。

今回のセミナーは教育関係者にも多数参加して下さった。このセミナーが北東北の教育現場が変わる一歩になることを願っている。

性教育ハンドブック Vol.6

『「ありのままのわたしを生きる」ために』

土肥いつき著

◆ A5判：82頁、頒価500円



主な内容

港にて（自分史の試み…）／船出のとき（小さなトゲのような思い…）／帆をあげる（教員生活のはじまり…）／舵を切る（「身体改造」開始…）／嵐の中で／かすかに見えた航路／新たな旅へ

著者プロフィール

1985年より京都府立高校教員。セクシュアルマイノリティ教職員ネットワーク副代表、トランスジェンダー生徒交流会世話人、まんまるの会（関西医科大学附属病院ジェンダークリニック受診者の会）世話人代表など。映画『coming out story』に出演。

※送料：1～4冊180円、5冊～8冊360円、9冊510円、10～14冊870円、15冊～19冊1180円、20冊以上無料。

◆ JASE ホームページ <http://www.jase.faje.or.jp/pub/pub.html> からお申し込みいただけます。
または、Email info_jase@faje.or.jp TEL 03-6801-9307 FAX 03-5800-0478

性教育の歴史を尋ねる

戦後・純潔教育編

茂木輝順

第35回

イタリア映画『明日では遅すぎる』の流行と 深草中学校の性教育実践の映画化

もてぎ てるのり
女子栄養大学大学院栄養学
研究科保健学専攻博士後期
課程修了、博士（保健学）

前回までに、京都市立深草中学校の性教育カリキュラムについて述べました。同校の性教育実践は、以下に述べるように、週刊誌やラジオで取り上げられ、映画にもなり、当時、多くの人に知られる存在になったと考えられます。

まず、1952年4月には、『サンデー毎日』が「性教育の実験教室として成功している京都深草中学」と、同校の性教育実践を高く評価する記事を4月27日号の巻頭に掲載します⁽¹⁾。そして、同年8月には、木村萬平が監督したセミドキュメンタリー映画『思春期の女生徒たち』がラジオ映画社によって製作されます。『日本教育新聞』によると、「京都市立深草中学校教師木村万平、同武子夫妻が現在教室で生徒に教え導いている性教育を映画にするもので、木村教師以下深草中学校の実在人物を総べて登場させ、また学校PTAの協力を得て京都にロケをするほか、五月中旬修学旅行で上京する同校生徒をセットに招き、セット撮影するなど性教育映画としては画期的な試みで教育上極めてデリケートなこの種問題に対し、学究的でも判り易い方法を選び、正しい知識の理解を与えようとする⁽²⁾」、という内容です。この映画は映画館では公開されず、各地の学校などで上映されたようです。さらに、同年9月30日午後3時45分から15分間のNHKラジオ第一放送の番組「教室訪問」で、同校の性教育実践が全国で紹介されます。

このように同校の実践がメディアに取り上げられ注目されたのは、同校のような性教育を行う中学校がかなり希少であったのはもちろんのこと、背景に、1952年当時に性教育自体への関心が高まっていたことが考えられます。

当時の新聞や雑誌を分析した小山が指摘していることですが、「1950年代に入ると（引用者注：子ども、とりわけ中高生の）性的な「問題」を指摘する声が出はじめ、それは1952年にピークに達して、1953年になるとさほどみられなくな」ります⁽³⁾。そして、1952年に性教育への関心が高まった理由の一つに、イタリア

映画『明日では遅すぎる』が大ヒットしたことがあげられます。「封切以来、連日男女学生がひしめきハンランし、ついに警官が整理に出動する騒ぎまで起」こした⁽⁴⁾この映画は、「正當に性教育をほどこされないために焦燥する少年少女たちの姿が、いたいたしくえかかれている⁽⁵⁾」と評されています。大まかに紹介すると、映画では、次のようなシーンがあります。

林間学校中に迷子になったミレツラとフランコは、嵐に遭い荒れ果てた教会で雨宿りをする。相思相愛であった二人はお互いの気持ちに気づきキスをして、そのまま眠ってしまう。その後、二人で眠っていたところを発見されたため、あらぬ疑いをかけられ、ミレツラは校長から「不道德者！ 汚辱者！」と罵られる。キスをしたために妊娠したと思ひ込んだミレツラは悲観し、湖に投身自殺をはかる⁽⁶⁾。

この映画が青少年を中心に大ヒットを遂げたのは、性教育を受けていない多くの青少年がミレツラに共感したからだと考えられます。映画を見た青少年からは、「教師の人々に多くみてもらいたい」、「お母さんに見せたい映画です」といった声も聞かれ、「息子を連れて性教育のつもりで見に来た」父親や、娘に教えられて息子と見に来た母親の姿も報じられています⁽⁷⁾。

その後、各社が青少年の性や性教育を題材とする映画を続々と製作していきます。1952年の6月から8月にかけて、『娘はかく抗議する』（松竹）、『若き日のあやまち』（新東宝）、『乙女の本能 ボート8人娘』（東映）、『思春期』（東宝）、などが公開されています。つまり、深草中の性教育実践が映画化された背景には、このような性教育映画の流行があったということです。

(注)

- (1)「性教育の実験教室 京都深草中学校に見るその実例」『サンデー毎日』1952年4月27日号 pp.3-11
- (2)『日本教育新聞』1952年5月22日 p.2
- (3)小山静子「純潔教育の登場—男女共学と男女交際」『セクシュアリティの戦後史』京都大学出版 2014年 p.24
- (4)『朝日新聞』1952年1月17日夕刊 p.2
- (5)『読売新聞』1951年12月23日夕刊 p.2
- (6)『明日では遅すぎる』のシナリオは、『キネマ旬報』1952年1月下旬号 pp.65-83に掲載されています。
- (7)同 (4)

先日、久しぶりにこの連載を交互に書かせていただいている岩室紳也先生にお目にかかることができました。お話すると、いつも生き方や考え方の違いに気づくのですが、その違いが面白いと思います。そして自分らしさとは何かに気づくことができます。多様性とは、型にはめて分類するというよりも、その場その場で違うものを選ぶ、というような単純なものではないかと思えてきます。

◇ ◇

これまで女子、男子、と交互に書かせていただいています。前回の男性と性交をする男性 MSM (Men who have Sex with Men) の話を受けて、今回は GID (Gender Identity Disorder) 性同一性障害改め GD (Gender Dysphoria) 性別違和についてお話ししたいと思います。

産婦人科医として出産に立ち合うのが好きな私は、性別違和の方と接するのは最初から得意だったわけではありません。性の相談外来を開設している中で、そういったニーズがあり、手探りで対応してきたというのが正直なところです。最初のうちは、何か特別な対応が必要な人、という認識で身構えていたように思います。

実は、思い起こせば、自分の学生時代にも性別に関するトラウマがいくつかあります。一つは、朝礼の後の髪形検査でのエピソードです。当時、私の中学校は男子の丸刈りがようやく廃止され、耳にかからないこと、とされていました。女子は肩につかないか、着く場合は結ぶ、それだけです。

しかし、少しも違反していない自分が呼び止められたのです。理由は、“男子の基準を満たしていたこと！” 勉強のじゃまになるからと、自分の意に反して耳にかからないほど母に刈り上げられた私の髪形が問題だといわれたのです。これは年頃の女子には堪えませんでした。その頃から、今思うと、自分なりのジェンダー問題があったのです。

もう一つ、これも大事なエピソードです。男に負けるな、女らしくしろ、と言われて育った私は、高校時代に応援団に憧れました。先輩に相談するとチアガールを勧められました。今なら喜んで(?) 入ったかも知れませんが、それではなくて、学ランを着て大声を張り上げることには憧れたのです。多くの女子は応援団の男子の先輩に憧れていましたが、私は自分になりたいと強く思いました。この時は有難いことに、私があまりにしつこかったからかもしれませんが、応援団の先輩が一日体験入部をさせてくれたのです。残念ながら私の甲高い声では務まらないとわかり、諦めることができました。このことは大変貴重な体験となりました。

性別違和を抱えた人は諦めるわけにはいかないのです。自分の性別と違う制服を着て、違う性として扱われることが延々と続くことを想像してみてください。性自認と体の性別、あるいは社会的な扱いに強く持続的な違和感を持っている毎日が違和感だらけで、自分自身の存在を諦めるしかなくなってしまうからです。

◇ ◇

私の性自認は、女性であることを確認したくて子どもを産んだので、染色体は調べていませんが生物学的には女性。性的対象は男性で夫が一人います。社会的には男性として扱って欲しいので女医さんと呼ばれると返事をしません。そして、服装の好みは女装で、膝上のスカートを履くのが好きです。このように、いわゆるストレートと思われる人間でも、性別に対する思いは人によって異なり単純ではありません。まして、体の性別とところの性別が一致しなければ、毎日が憂鬱になってもおかしくありません。また、遠慮して家族に気を遣う人が多いのですが、身近な誰かが理解し、そのままの生き方を受け入れてくれるだけで生きやすくなります。

「性同一性障害」は、平成 15 年に「性同一性障害に関する特例法」*ができて、要件を満たせば性別変更ができるようになりました。累積で 1 万人ほどが戸籍

上の性別変更をしています。しかしながら、この法律は、未成年の子どもがいたり、性腺除去を行っていないと法的な性別変更の申し立てができないという点で、現在、国際社会からは非難されています。

医療化し過ぎだとして、アメリカ精神神経学会の診断基準である DSM でも改訂第 5 版で、「性同一性障害」から「性別違和」に変更されました。現状では、精神科 2 か所で診断を受け、産婦人科または泌尿器科で診察を受けて半陰陽等を否定してから、作成された意見書が判定会議で通ったらホルモン療法開始し、数少ない国内の医療機関や医療ツーリズムでタイへ渡航して SRS といわれる性別適合手術を受けて、家庭裁判所に提出する、という手続きが取られています。医療化することは、後戻りできない手順の確認のためとなっていますが、他者が認定するような類のものではないとも言えるでしょう。医療は医療で、他の診療と同じように手を貸す時点で、責任の所在を明らかにしておきたいというスタンスを取りたがりです。

◇ ◇

身体権を誰かにコントロールされるということへの違和感を、私たちはもっと身近に感じるべきなのでしょう。この法律ができた背景は時代の要請もあり、手続き上仕方ないと思われていましたが、今となると一刻も早く時代のニーズに合わせるべきだと思います。

個人輸入などでやみくもに行われてきたホルモン療法も、ずいぶん標準化されて安全になったようですし、結婚することや子どもを持つことなど、本来の自分の性になるだけでなく、自分らしく人生を生きることに関心がシフトしているように思います。

当たり前のことですが、社会の容認の仕方によってニーズも変わっていきます。また、性腺除去も、性別変更要件になっているかどうかは別として、生涯のホルモン補充量を少なくする意味がありますし、パートナーとの間の性行為に必要なか否かを見極めて、膣や陰茎まで作りこまなくてもいい風潮もあります。

これらは、トレンドであるだけでなく、素直な個々のニーズとしてどれも尊重したいところです。しかしながら、手術に絶対はなく、海外での手術の術後ケアを引き受けるところも限られるため、バックアップとして国内で診療できるところの拡充にはまだまだ課題

があると思います。

◇ ◇

実際、「性の相談外来」として 2000 年以降、性交疼痛症や、膣瘻、セックスストレス、そして性同一性障害の当事者の診療に関わってきましたが、新たに性の相談を受ける産婦人科はそう増えていません。これはスキルアップのトレーニングの場の少なさにもよるのでしょうし、産婦人科医の中にある性科学への無知や躊躇も否定できないと思われます。実際、私が第 33 回日本性科学学会学術集会の大会長をさせていただいたとき、ある産婦人科の重鎮が、私に向かって「僕はこのようなものを学会とは認めない」と堂々とおっしゃったのです。

このようなことは、性の領域ではよく起こります。「性別違和」に関しても、「そういう人がいるらしいが、自分は認めない」、「自分だったら我慢する」など不思議なコメントを堂々とされることがあります。私は当事者ではないので、実際は自分が接している当事者の方を代弁しようとするだけなのですが、とても当事者に直接聞かせられないようなことはいくらかでもあり、そして実際は多くの当事者はそのような扱いを日常的に、全くの第三者や家族、知人から受けています。

誰かの性を他の誰かが否定することにどのような意味があるのでしょうか。否定することができるのでしょうか。その人をそのまま受け止める、というのはどうも誰にでもできることではないようです。しかし、それができないことは、できない人にとっても、された人にとっても辛いことではないかと思います。

自分を大事にすること、人を大事にすることは、人間社会でとても大事なことです。誰かを我慢させて自分だけよい思いをすとか、自分さえ我慢すればみんなが幸せに過ごせるなどという偽善に振り回されず、その人の人となりを尊重することができたら、そして性に対する刷り込みからもう少しだけ自由になれば、男性も女性もその縛りに囚われることなく、人生を全うできるように思えてなりません。

- ※ 1. 二十歳以上であること。
2. 現に婚姻をしていないこと。
3. 現に未成年の子がいないこと。
4. 生殖腺がないこと又は生殖腺の機能を永続的に欠く状態にあること。
5. その身体について他の性別に係る身体の性器に係る部分に近似する外観を備えていること。

BOOK GUIDE

今月のブックガイド

「人間らしく」あるための物質？

ずいぶん前、薬物依存症の自助グループと交流を持ったことがある。彼らは予想外に「ふつうのひと」であったが、ふとしたきっかけでドラッグに関わるようになり、道を踏み外してしまった。ある者は、覚醒剤で家族まで不幸にした罪を背負い、ある者は、クスリがやめられない自身を悲観して焼身自殺をしようとした過去を持っていた…。そのときの私は、薬物とくに覚醒剤というのは、人間のなにかをも狂わせてしまう恐ろしい化学物質だが、自分には縁もゆかりもない…という印象を抱いただけだった。

ところが、本書『脳内麻薬』を読んで驚いたのだが、覚醒剤やコカインといった薬物は、むしろ自分に縁があるものともいえるのだ。以前は、覚醒剤は、人間が本来持っていない快楽物質で、それが入り込むことによって脳が極端に刺激されて壊れてしまう…という理解だった。しかし実際は、神経を興奮させるのは人間の脳内で分泌されるドーパミンのほうで、覚醒剤の働きは、ドーパミンの放出を促し、それを制御する機能を損なわせることにあるのだという。つまり、快楽物質は、私たちの脳のなかにすでに存在し、覚醒剤はその力をより増大させるものだったのである。

そう、私たち人間は、社会生活を引き換えにするほどのリスクな快楽をもたらす物質を、脳で作り出すことができるのだ。そして、その力こそが私たちが「人間らしく」あることの根本でもあり、人間が文化、文明というものを作り出してきた要因でもあった…というのが、本書の明らかにするところだろう。

注目すべきはドーパミンである。脳のなかでドーパミンが分泌されるのは、「楽しいことをしているとき」「目的を達成したとき」「他人に褒められたとき」「セックスで興奮しているとき」…等々、人生のプラスの部分



脳内麻薬

人間を支配する
快楽物質ドーパミンの正体

中野信子著
幻冬舎新書
定価 760 円＋税

には少なからずドーパミンが関わっていることになる。著者がいうように、「目に見える直接的な報酬がない行為を地道にやり続けられるのは、人間だけ」で、他の動物たちは目の前の損得だけで行動する。人間が努力できるのは、将来の利得や賞賛を予測することでドーパミンが放出されるゆえ。まさに目から鱗である！

そして、人間はそういう想像力によって、利益が定かでない場合でも、地道に努力を積み重ねることができ、そのことによって多くのものを生み出してきた。ということは、キモチよくなりたからクスリに走るのも、努力によって学業を成し遂げるのも、行動原理としては変わらないかもしれない。なぜなら、どちらも（ドーパミンによる）快楽がそうさせるのだから。

しかし、人間の行動を方向付けるほど効果のある「脳内麻薬」ゆえに、場合によっては、病的な状態をもたらすことだってある。それが依存症だ。依存症は薬物依存から摂食障害、パチンコ依存まで様々あるが、例えば、セックス依存症を著者はこう説明する。「性的な快楽をもたらす刺激は、脳の報酬系を活性化させますから、その快楽があまりに大きいと、耐性が形成されてしまいます。そして、性的な頻度や強度が増し、やめたいと思っても離脱症状が起こってやめられない状態になります」。かつてはモラルの問題と考えられていた過剰なセックスは、立派な？ 病なのである。個人的な話で恐縮だが、私自身、実は、パチンコ依存症だとはっきり断言できる。たしかに、パチンコ店へ足が向いてしまうのは、お金を儲けようという動機からではない。確率論からしてパチンコでは儲かるどころか損をするしかないのはわかっている。けれど、どうにもやめられないのは、ときに脳がハイになりたくてしょうがないからだだったりする。そして、運良く大当たりが出れば、えもゆえぬ興奮を得るのだ。つまり、あの瞬間に頭蓋骨のなかでは「脳内麻薬」が分泌されているのだろう！

(作家 伏見恵明)

▶▶ **3月13日(日) 13:00 ~ 16:30** ◀◀

関西性教育研修セミナー 第20回記念イベント

Keep on Standing 押されても 揺らいでも 立ち続けることの意味を問う

性教育を取り巻く環境は、時代と共に変化を遂げてきました。性教育に関するパッシング、性教育冬の時代を経て、今、性教育を実践する者として、時には立ち向かい、押されたり、揺らいたりしながらも、何を伝え続け、立ち続けていけばいいのか。

性教育パッシングの渦中でまさに立ち続け、伝え続けることを実践してこられた池上千寿子さんから性教育、性科学、フェミニズム、さまざまな“性”に関わる場で経験してこられたことについてお話を伺い、アクティビズムにおいて、教育現場において、これまでの歴史の中において、それぞれの「立ち続ける理由(わけ)」を、みなさんと共有できたらと思います。

講師 基調講演「たかが性、されど性～無理をしないでいられるって、サイコー～」

講師：池上千寿子（東京大学卒業後、出版社勤務を経て、1982年からハワイ大学「性と社会太平洋研究所」でセクソロジーを学ぶ。1994年「ぶれいす東京」を設立しエイズ予防とケア活動に従事。2012年まで代表、現在は顧問として活動。2005年エイボン女性教育賞受賞。2009年日本エイズ学会アルトマーク賞受賞、2011年WAS金賞を受賞。著書に『思いこみの性、リスキーなセックス』ほか多数）

教育講演：「アクティビスト、パッシングと向き合う」（岡田実穂：RC-NET代表）、「教育現場における“性”の扱い」（野坂祐子：大阪大学大学院准教授）、「性教育をめぐる市民戦争とその教訓」（東 優子：大阪府立大学教授）

会場 大阪府立大学「I-site なんば C1」（南海なんば第1ビル2階）
大阪市浪速区敷津東2-1-41 TEL 06-7656-0441（代表）※会場の問い合わせのみ

参加費・申込み先等

参加費：一般1,000円、学生・NPO関係者500円 主催：関西性教育研修セミナー実行委員会 協賛：日本性教育協会
事前申込み先：E-mail higashi@sw.osakafu-u.ac.jp（お名前・所属・連絡先を明記してお申込下さい）
※空席があれば当日参加可能です

▶▶ **3月19日(土曜日) 12:30 ~** ◀◀

第26回日本性機能学会東部総会

“A NEW HOPE” ～北の大地で新たなる希望を見つけよう～

内容 教育講演：「排尿障害治療の新たなる希望～中枢からのアプローチ」榊原隆次（東邦大学医療センター佐倉病院神経内科）
特別講演：「前立腺がん：性機能治療の新たなる希望」高柳明夫（札幌医科大学泌尿器科）、海法康裕（東北大学大学院医学系研究科外科病態学講座泌尿器科分野）

シンポジウム：「男子性教育における新たなる希望～性機能障害の予防・治療を見据えて」
天野俊康（長野赤十字病院泌尿器科）、武井実根雄（原三信病院泌尿器科）、今井伸（聖隷浜松病院泌尿器科）
田井俊宏（東邦大学医学部泌尿器科）

会場 グランドパーク小樽 5階（北海道小樽市築港11-3）

問い合わせ等 第26回日本性機能学会東部総会事務局
〒047-0008 北海道小樽市築港10-1 済生会小樽病院 泌尿器科内 担当：堀田浩貴・安達秀樹・吉田理恵
TEL 0134-25-4321 FAX 0134-25-2888 E-mail：otaru26@saiseikai-otaru.jp